

# 比 恵 72

—比恵遺跡群第132次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1294集

2016

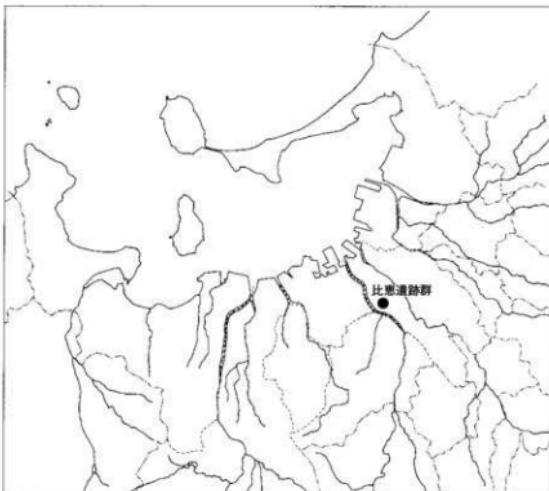
福岡市教育委員会



H I E  
比 恵 72

—比恵遺跡群第132次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1294集

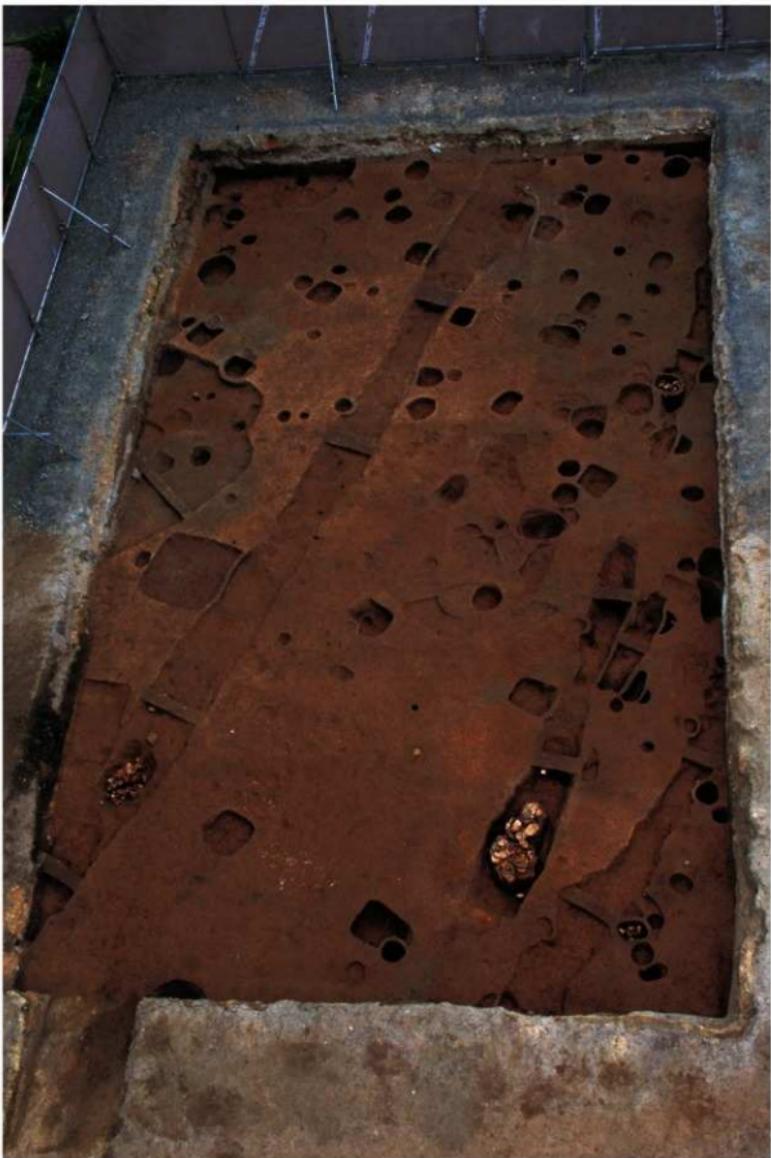


遺跡略号 HIE-132  
調査番号 1411

2016

福岡市教育委員会





調査区全景（北西から）



## 序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の窓口として発展を遂げてきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産があり、それらを保護し、後世に伝えていくことは、現在に生きる私たちの責務です。

本市では、近年の著しい都市化の中で失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後世まで伝えるよう努めています。

本書は、事務所建設工事に伴って実施した比恵遺跡群第132次調査について報告するものです。

今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを確認しました。また、道路状遺構の側溝と考えられる溝の一部も確認し、多くの弥生土器や土師器を中心とする遺物が出土しました。これらは弥生時代から古墳時代にかけて、大規模な拠点的集落として発展していた当該地域の歴史を解明していく上での重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、事業主様はじめとする関係者の皆様には多大なご協力とご理解を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成28年3月25日  
福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## 例　言

1. 本書は、福岡市博多区博多駅南4丁目1番地内において、事務所建設工事に伴い福岡市教育委員会が、平成26（2014）年5月29日から同年7月12日にかけて発掘調査を実施した比恵遺跡群第132次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、受託事業および国庫補助事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図作成および写真撮影は、調査担当の吉田大輔が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測図作成は吉田が、写真撮影は井上繭子が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は、林山紀子・吉田・山本晃平が行った。
7. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ}40'$ 西偏する。
8. 調査で検出した遺構については、竪穴住居をSC、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、柱穴・小穴をSPとして通し番号を付している。
9. 本書に関わる記録類・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
10. 本書の執筆および編集は吉田が行った。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次數	第132次	遺跡略号	HIE-132
調査番号	1411	分布地図図幅名	037東光寺	遺跡登録番号	0127
申請面積	796.31m <sup>2</sup>	調査対象面積	243.04m <sup>2</sup>	調査面積	214m <sup>2</sup>
調査期間	平成26（2014）年5月29日～7月12日	事前審査番号	25-2-1164		
調査地	福岡市博多区博多駅南4丁目1番				

## 本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	4
1. 概要	4
1) 調査の経過	4
2) 調査の概要と層序	4
2. 遺構と遺物	4
1) 積穴住居（SC）	4
2) 掘立柱建物（SB）	8
3) 土坑（SK）	10
4) 溝（SD）	14
IV. 結語	20

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図（1/25,000）	3
第2図 調査地点位置図（1/1,000）	3
第3図 調査区全体図（1/100）	5
第4図 SC 2 実測図および出土遺物実測図（1/60・1/4）	6
第5図 SC 62 実測図 および出土遺物実測図（1）（1/60・1/4）	7
第6図 SC 62 出土遺物実測図（2）（1/4）	8
第7図 SB 111・132・133 実測図（1/60）	9
第8図 SB 111 出土遺物実測図（1/4）	10
第9図 SK 6・8・56・101・105・118 実測図（101は1/20、その他は1/30）	11
第10図 SK 6・8・56・105・118 出土遺物実測図（1/4）	13
第11図 SD 15 実測図（1/100・1/40）	14
第12図 SD 63・90 実測図（1/40）	15
第13図 SD 15・63・90 出土遺物実測図（1/4）	16
第14図 SD 88 実測図（1/40）	17
第15図 SD 88 出土遺物実測図（1）（1/4）	18
第16図 SD 88 出土遺物実測図（2）（1/4）	19

## 巻頭図版目次

調査区全景（北西から）

## 図版目次

図版 1	図版 3
(1) 調査区全景（南西から）	(14) SD 15（南から）
(2) SC 2（北から）	(15) SD 15 土層断面①（南から）
(3) SC 62（北から）	(16) SD 63・88（南から）
(4) SC 62 遺物出土状況（北から）	(17) SD 88・90（南から）
(5) SB 111（西から）	(18) SD 88 遺物出土状況（北から）
図版 2	(19) SD 88 遺物出土状況近景（東から）
(6) SK 8 土層断面（西から）	(20) SD 88 土層断面（北西から）
(7) SK 8（西から）	(21) SD 88 完掘状況（北から）
(8) SK 56 遺物出土状況（南東から）	(22) SC 62 内 SP114出土 25
(9) SK 56 遺物出土状況（東から）	(23) SK 56 出土 36
(10) SK 56 遺物番号34 出土状況（東から）	(24) SK 56 出土 34
(11) SK 101 遺物出土状況（北西から）	(25) SK 56 出土 37
(12) SK 105 上層断面（南から）	(26) SD 15 出土 62
(13) SK 118 遺物出土状況（北東から）	(27) SD 15 出土 69
	(28) SD 15 出土 88
	(29) SD 88 出土 106

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成26（2014）年2月6日付で、福岡市博多区博多駅南4丁目1番地内(敷地面積：796.31m<sup>2</sup>)における事務所建設工事に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課宛てになされた。申請地は周知の埋蔵文化財である比恵遺跡群に含まれ、周辺ではこれまでに、北側で第56次・59次・127次調査、東側で第5次調査、南東側で第22次・70次調査が行われており、申請地に遺跡が遺存している可能性が高いと考えられた。また、同年2月20日に実施された確認調査では、現地表下80cm以下で遺構面となり、幅1m強の溝が確認され、敷地の西側は緩やかに傾斜し、遺構密度が低くなっていることも判明した。これを受け、遺跡の保全等について申請者と協議を行った。その結果、建物建設部分で工事による埋蔵文化財への影響が回避できない243.04m<sup>2</sup>については記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成26（2014）年5月21日付で事業主である個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査委託契約を締結し、同年5月29日より発掘調査を、翌平成27年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。なお、発掘調査および資料整理・報告書作成とともに一部を国庫補助事業として行った。

## 2. 調査の組織

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査：平成26年度・整理報告：平成27年度）

調査総括 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

課長 常松幹雄（26・27年度）

同課調査第2係長 板本義嗣（26年度）

調査第1係長 吉武 学（27年度）

庶務 同埋蔵文化財審査課

管理係長 内山広司（26年度）

大塚紀宜（27年度）

同課管理係 川村啓子（26・27年度）

事前審査 同埋蔵文化財審査課

事前審査係長 佐藤一郎（26・27年度）

同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司（26・27年度）

事前審査係文化財主事 板倉有大（26・27年度）

調査担当 同埋蔵文化財調査課

文化財主事 吉田大輔（26・27年度）

発掘作業 石井清子 石川洋子 辛川容子 芹川淳子 平江裕子 水田正敏

水田ミヨ子 諸泉良子

整理作業 井手由紀子 林由紀子 森山晶子

## II. 遺跡の立地と環境

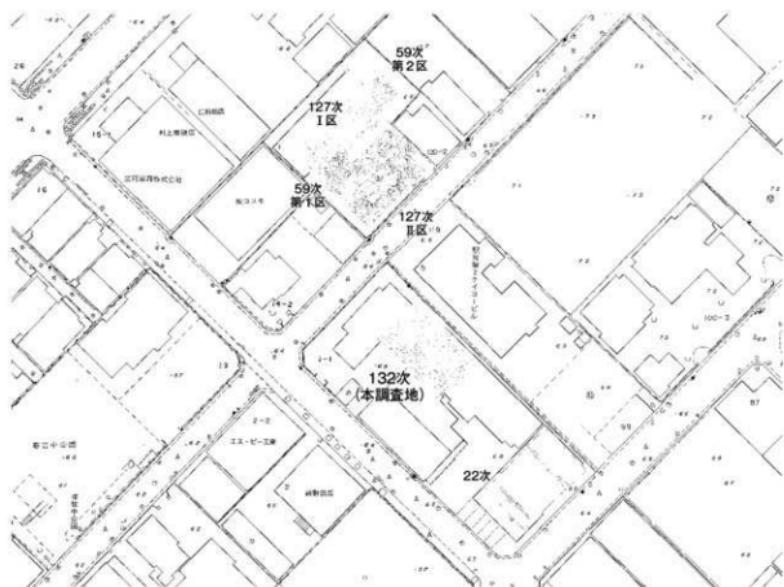
比恵遺跡群は、福岡平野のはば中央を博多湾に向かって北流する那珂川と御笠川に挟まれた中位段丘上に立地する。この丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上に堆積したAso-4火碎流堆積である八女粘土層と鳥柄ローム層を主な堆積物とする洪積丘陵である。隣接する那珂遺跡群とは、浅い谷を介しながらも連続した同一丘陵上にあり一連の遺跡群を構成している。北側は、博多遺跡群が立地する古砂丘背面にあたる後背湿地となっている。遺跡の範囲は、那珂遺跡群と併せて南北約2.4km、東西約0.8kmにおよび、現地表面の標高は約4.5～9mを測る。現在では、戦前に行われた区画整理事業や市街地化による大規模な地形の変更により、平坦な地形となっているが、本来は狭い谷や河道が複雑に入り込む丘陵である。本遺跡群は、これまでの調査成果から大きく3地点の台地に分かれることが判明している。遺跡群の大半を占める中央台地の北側には東西方向の河道を挟み北台地があり、また西側には幅100m以上の南北方向の谷部(河道)を介して西台地が島状に存在する。

比恵遺跡群では、これまでに多くの調査が実施されており、縄文時代晩期終末から中世にかけて各時期の遺構・遺物が多量に出土している。遺物は、旧石器時代まで遡り、ナイフ型石器が出土する。縄文時代前期には突帯文土器が出土するが、この時期の遺構は確認されていない。縄文時代晩期末から弥生時代前期になると遺構・遺物は台地北側・西側の縁辺部に多く分布し、弥生時代中期には、遺跡は台地のはば全域に拡大する。中期後半になると、大型の円形竪穴住居が出現し、後期には台地中央部を中心とした集落となる。この時期には、銅鑛や青銅鋤先、鉄器が出土している。また、青銅器の鋳型・取瓶やガラス滓も出土しており、青銅器やガラスの鋳造・生産に携わった集団が存在したことを示唆している。弥生時代中期後半から後期にかけては、単位集落を囲むような環濠と考えられる大溝の一部が確認されている。これとは別に、地形に規制されず、丘陵上を直線的に走る並列した2条の溝が発見されている。この2条の溝は丘陵上を南北に走り、隣接する那珂遺跡群まで統合しており、延長1.5kmを超える。この溝は、道路状遺構の側溝である可能性が指摘されている。溝の掘削の上限は弥生時代後期後葉であり、古墳時代初頭を通じて溝としての機能を果たしていたことが窺える。この時期の遺構は溝の外側に展開しており、その方位は溝の規制を大きく受けているようである。

今回報告する第132次調査区は、遺跡群の展開する台地のうち、中央台地の北西側に位置している。本調査区の周辺では、これまでに多くの調査が実施されている。北側では、第59次・127次調査が行われている。第59次では、土坑6基、井戸1基、柱穴48基、溝状遺構5条が検出された。竪穴住居跡を思わせる落ち込みが東端付近でみられるが、住居は確認されていない。埋土出土遺物によれば、弥生時代後期前半と考えられる。土坑は、不整形の掘り方をもつものが多く、壁面も底面も段掘り状で凹凸が激しく、廃棄土坑と考えられている。溝状遺構は、U字形の断面で細長く延び、他の遺構との切り合いのため全体の形状が知れるものは2条のみである。ただし、底面は土坑状に凹凸で、水が流れた形跡はない。第127次でも攪乱部分を除き、全面で密に遺構が検出されており、竪穴住居4軒、溝状遺構3条、土坑と柱穴状遺構が多数確認されており、弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と考えられる。第22次調査区の西半は、台地の西縁にあたり西に向かって落ち始め、遺構が少ないが、東半は弥生～古墳時代の遺構が密に分布する。古墳時代前期の土器が出土する溝4条は、東側・西側にそれぞれ2条があり、並列している。東側の溝S D18とS D79の間は途切れ幅約3mの陸橋状をなし、第50次調査区で確認されている溝S D292の延長と考えられる。西側の溝S D09とS D10はほぼ同一方向に延びているが、一部が重複しており、掘り直されたものと推定されている。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点位置図 (1/1,000)

### III. 調査の記録

#### 1. 概要

##### 1) 調査の経過

比恵遺跡群第132次調査区は、博多区博多駅南4丁目1番地内に所在する。調査前の状況は、標高約6.7mを測る宅地であった。調査の対象は「I. - 1 調査に至る経緯」に記したとおり、事務所建設部分の243.04m<sup>2</sup>としたが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は214m<sup>2</sup>である。

発掘調査は平成26（2014）年5月29日に開始した。まず、重機による表土剥ぎ取りに着手し、並行して機材等の搬入、調査区の壁面養生などの環境整備を行った。6月2日から、遺構検出等の人力作業を開始し、その後、検出した遺構の掘り下げや、遺物の取り上げを行った。確認された遺構は適宜、写真撮影を行い、また1/10・1/20の図面を作成して記録した。7月2日に高所作業車による調査区の全体写真を撮影し、竪穴住居や溝が確認された部分については、調査区周辺の安全に配慮しながら、調査区を拡張し、その広がりを確認した。その後、11日に発掘機材等の撤収作業、12日に重機による埋め戻しを行い、第132次調査を完了した。

##### 2) 調査の概要と層序

調査区の土層は、基盤が暗褐色を呈する鳥栖ローム層で、遺構はこの上面で検出した。標高は東側で約5.9m、西側で約5.7mを測り、東側から西側に向かって緩やかに傾斜し、調査区の西側に入り込む谷部に向かって落ち込んでいる状況が看取された。同層の上層には弥生土器片や土師器片を含む暗灰褐色粘質土が10~15cm程度堆積していた。発掘調査は、基盤となる鳥栖ローム層上面を遺構面とし、その上層に堆積していた近現代のガラ等を含む表土と遺物包含層である暗灰褐色粘質土の大半を重機で剥ぎ取って実施した。

今回の発掘調査では、調査区のほぼ全面で遺構を確認し、弥生時代中期中葉から後期初頭の竪穴住居や掘立柱建物・土坑・ピット、弥生時代終末から古墳時代前期の溝・土坑・ピットが検出された。調査時の遺構番号は、遺構の種別に問わらず通し番号を付し、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則として調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。ただし、掘立柱建物を構成する柱穴については、調査時点で付した番号を、整理・報告時点ではP1から順に番号を振り替えている。

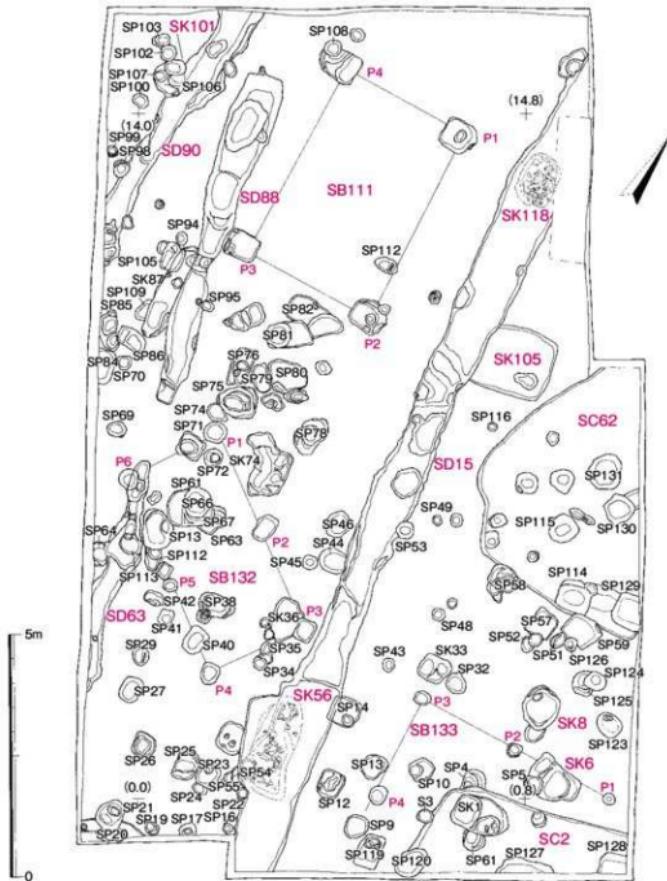
#### 2. 遺構と遺物

以下、遺構の種別ごとに報告を行う。

##### 1) 竪穴住居（SC）

遺構全体の検出はできなかったが、弥生時代の竪穴住居2軒を検出した。

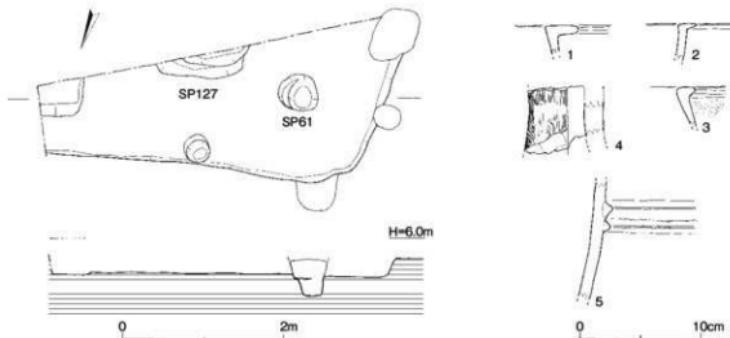
SC2（第4図） 調査区の南東隅で検出した竪穴住居である。そのほとんどが調査区外へと広がっているため、全体の形状や規模は不明である。確認できた部分の規模は、北壁約3.4m、西壁約2.3mが遺存する。残存壁高は約0.2mである。全体の形状は、確認できた部分から推定するとやや不整形な隅丸方形と考えられる。周溝やベッド状遺構は確認されず、主柱穴も明確ではない。埋土は、暗褐色粘質土で黄橙色粘質土が斑状に多く含まれていた。遺物は主にこの埋土中から出土したが、



第3図 調査区全体図 (1/100)

弥生土器と考えられる小片や黒曜石剥片が少量出土した。

**出土遺物（第4図）** 遺物は、遺構埋土中から出土し、床面上の遺物はなく、量も少ない。1～5は弥生土器で、器面は全体に摩滅している。1・3は壺の口縁部片で、1・2は断面逆L字状を呈す。1の胎土は密で、細かい砂粒を含む。2は口縁端部を少しつまみ出すようにして作り出す。淡黄橙色を呈し、胎土には細かい白色砂粒と赤褐色粒を含む。3は断面三角形を呈し、やや丸みを帯びる。淡橙色を呈し、胎土には白色砂粒を多く含む。胴部外面は縦方向の刷毛目が施される。4は高坏脚部で

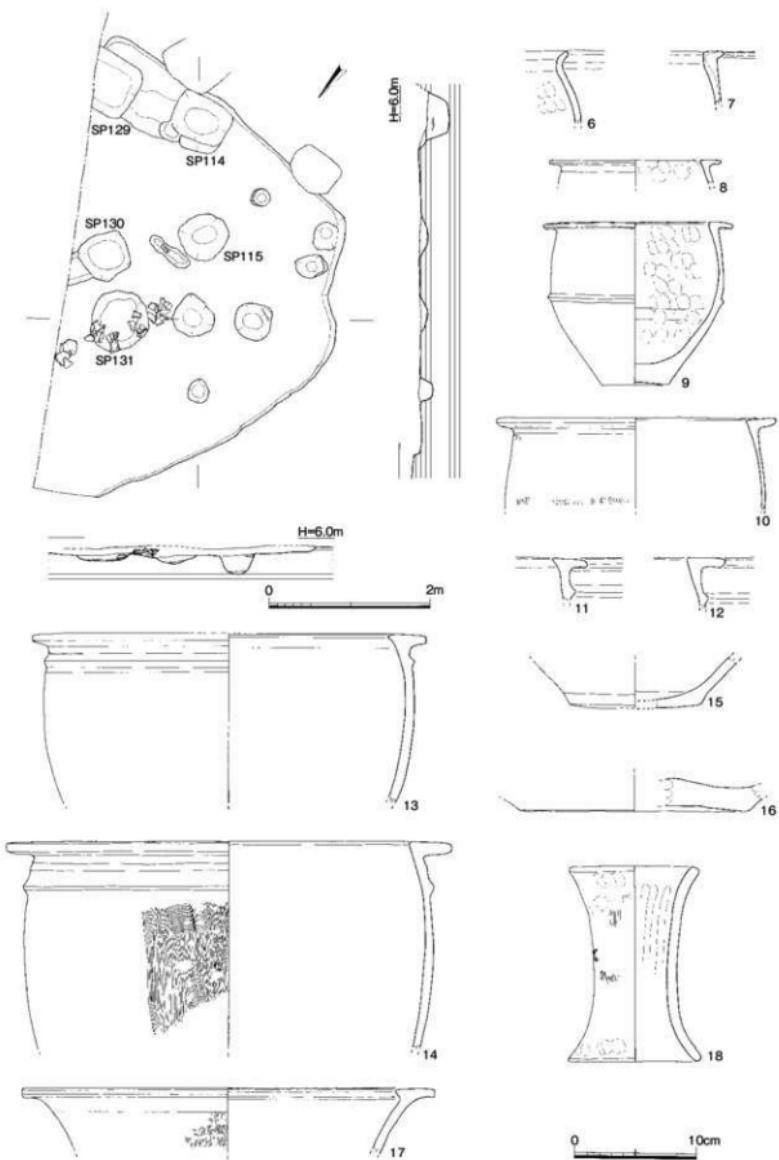


第4図 S C 2 実測図および出土遺物実測図（1/60・1/4）

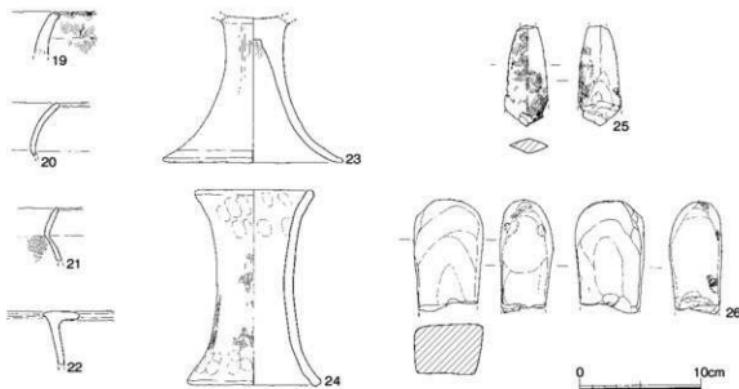
ある。外面は縦方向の刷毛目が施される。胎土は粗く、白色砂粒や赤褐色粒を多く含み、径5～6mmの黒灰色砂粒を含む。5は、床面ピットのSP127から出土した。壺の胴部と考えられ、断面三角形を呈す2条の突帯が貼り付けられる。外面は灰褐色、内面はにぶい橙色を呈し、胎土は密でやや大きめの砂粒を含み、焼成は良好で堅緻である。二次的に被熱している。出土遺物から弥生時代中期後半の住居であると考えられる。

S C 62（第5図） 調査区の東側中央付近で検出した。一辺約3.6mで、深さ0.2m程度が残存していた。検出した隅の部分がいびつであり、その形状から方形の住居が重複している可能性も考えられたため精査したが、住居の重複関係は認められなかったため、一軒の住居として報告する。遺構の半分以上が調査区外に広がっているため、全体の形状は明確ではないが、不整な方形状をなすものと推定される。覆土は暗褐色粘質土で黄褐色粘質土を斑状に多く含んでいた。覆土内からは弥生土器の細片や黒曜石剥片が出土し、中央やや北寄りの床面および床面ピットから壺、甕、器台等がまとまって出土した。住居内では柱穴や小穴が検出されたが、主柱穴は判然としない。

出土遺物（第5・6図） S C 62の覆土、床面および住居内検出のピットから出土したものである。6は小型壺の口縁部である。口縁端部は平坦に仕上げられる。胴部内面は指押さえで調整される。7～14は甕である。7は断面L字状を呈すが、あまり張り出さない。器壁は厚く、内面は指ナデで調整される。8・9は小型の甕で、口縁部は断面逆L字状を呈す。8は口径14.2cmで、内面は指押さえで調整される。9は口径15.6cmで、口縁部はやや垂下する。胴部の最も張り出した部分に断面三角形の突帯が一条巡る。内面には指オサエの痕跡が明瞭に残る。底部は厚く、わずかに上げ底である。10は口縁部がわずかに立ち上がる。口径23cmで、外面は縦方向の刷毛目が施される。11～14の口縁部断面が鶴先状を呈し、口縁部下部に断面三角形の突帯を一条巡らせる。11はにぶい灰橙色を呈し、暗赤褐色粒を少量含む。12は淡橙色を呈し、胎土は密で細かい白色砂粒を多く含み、金雲母と角閃石を少量含む。13の内面は丁寧にナデ調整され、胎土には細かい砂粒を多く含み、径5mm程の砂粒と金雲母を少量含む。14の外面は縦方向の刷毛目、内面はナデ調整され、丁寧な整形・調整がなされる。内外面とも黒色顔料が塗布されている。ただし、内面は意図的に塗ったものか垂れたものか判断が難しい。胎土は密で、微細な金雲母を多く含む。15・16は壺か甕の底部である。15は底径11.0cmで、わずかにレンズ状を呈する。内面は指押さえで調整される。外面は淡黄白色、内面は灰白色を呈し、胎土



第5図 SC62実測図および出土遺物実測図(1)(1/60・1/4)



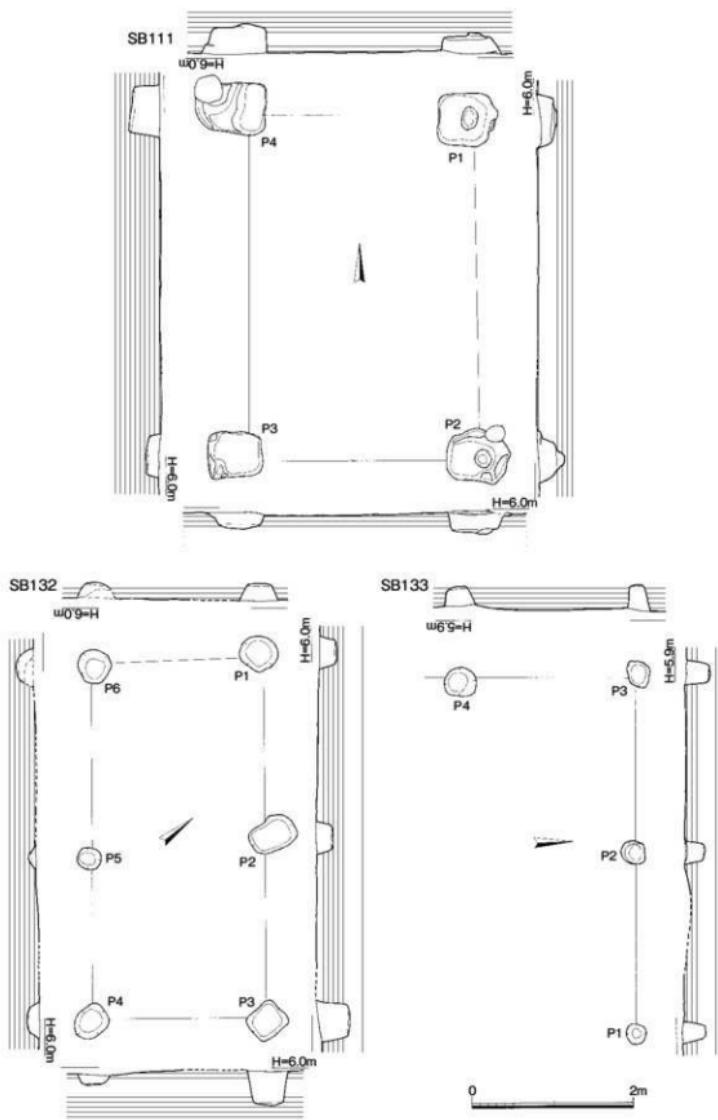
第6図 SC62出土遺物実測図 (2) (1 / 4)

には角閃石を少量含む。16は底径18cmで、器壁は厚く、上げ底である。17は広口壺の口縁部で、鋸先状を呈する。口径34cmで、外面は縦方向の刷毛目を施した後、粗くナデ調整され、内面は横方向の刷毛目を施し、丁寧にナデ調整される。内外面とも赤色顔料が施されるが、磨滅により大部分が剥落している。18は器台である。全体に磨滅するが、口径10.6cm、底径11.0cm、高さ16.1cmを測る。外面は縦方向の刷毛目の後、ナデ調整され、口縁部下部と底部上部付近には指オサエ痕が残り、内面は縦方向に指ナデ調整される。19はS P115出土の甕である。如意形の口縁部で、口唇部には幅3mmほどの板状工具で刻目が施される。20・21はS P129出土遺物である。20は壺の口縁部と考えられ、わずかに外反しながら立ち上がり、端部は平坦に仕上げられる。淡橙色を呈し、胎土には赤褐色粒を少量含む。21は小型丸底甕である。内面は横方向の刷毛目で調整される。22はS P127で出土した。甕の口縁部片で、鋸先状を呈する。全体に磨滅が著しく、調整は不明である。23・24はS P131で出土した。23は高环の脚部で、底径14.9cmを測る。全体に磨滅するが、外面は縦方向にミガキと丹塗りが施される。くすんだ赤橙色を呈し、胎土には金雲母を少量含む。24は器台で、口径9.9cm、底径11.1cm、器高16cmを測る。外面は刷毛目の後、指ナデ・指オサエで調整され、内面も指押さえによる調整が施される。25・26はS P114で出土した。25は磨製石剣で、先端と下部が欠損する。長さ8.2cm、幅最大3.4cmが残存し、厚さは1.1～1.3cm程度である。全体に細かい擦痕が残る。26は砥石で欠損しているが、全面が利用されている。敲石として使用された可能性もある。長さ8.6cm、幅最大5.7cm、厚さ4.3～4.5cmが残存する。出土遺物から、中期中葉から後葉の遺構と考えられる。

## 2) 掘立柱建物 (S B)

掘立柱建物として3棟を報告する。なお、S B111については、調査時に掘立柱建物として検出したものであるが、S B132・133については、整理時に図面上での検討で認識できたものである。

S B111 (第7図) 調査区の北側で検出された。梁行4.7m、桁行2.8mを測る1間×1間の建物である。主軸はN-2°-Wにとり、確認された2軒の竪穴住居とは主軸を描える。建物を構成する柱穴は、長軸0.7～0.8m、短軸0.5～0.6mで平面長方形を呈し、深さ0.25～0.3mが残存する。出土遺物は、いずれの柱穴からも遺物はほとんど出土していない。図示し得た3点を報告する。



第7図 SB111・132・133実測図 (1 / 60)



第8図 S B 111出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物（第8図）27・28・29はP 1から出土した。27は古式土師器の二重口縁壺の口縁部で、混入品と考えられる。口縁端部下部は下方につまみ出される。全体に磨滅するが、口縁部内面は横向の刷毛目が施される。28・29は断面逆L字状を呈し、口縁部はそれほど張り出さない。出土遺物は少ないが、これらの遺物から弥生時代中期中葉～後葉の時期と考えられる。

S B 132(第7図) 調査区の南側西寄りで検出された。梁行4.3m、桁行2.0mを測り、梁行の柱間は2.0～2.2mである。主軸はN-52°-Wにとる。建物を構成する柱穴は0.25～0.4cmの平面円形・方形を呈する。P 3以外は概ね0.2～0.25mほど残存し、P 3はやや深く0.4mを測る。出土遺物は、いずれの柱穴からも図示できるような遺物は出土しなかった。出土した小片から推測すると弥生時代中期後半頃の時期かと思われる。

S B 133(第7図) 調査区の南東隅で検出された。梁行4.3m、桁行2.1mを測るが桁行はこれより延びる可能性もある。主軸はN-89°-Wにとる。柱穴は径0.2～0.3mのはば円形で、深さは概ね0.3mが残存する。1間×2間の掘立柱建物として報告したが、柱穴は比較的小さく、桁・梁行それぞれが延長することも考えられるため、檻などの構造物であった可能性もある。柱穴からは弥生土器の細片がわずかに出土したが、遺構の時期は不明である。

### 3) 土坑 (SK)

S K 6(第9図) 調査区の南東側で検出された。長軸1.1m、短軸0.7m、最も深い部分で0.3mを測り、二段掘り状で、平面形は不整な長方形を呈する。

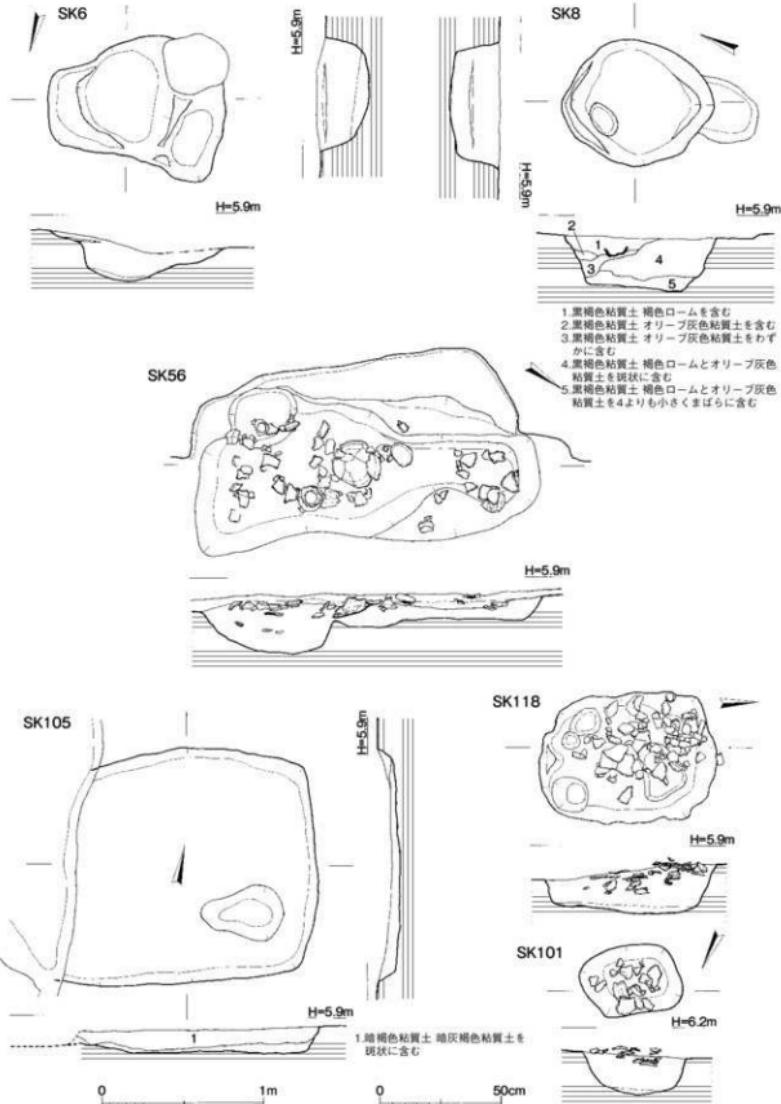
出土遺物(第10図) 30・31はS K 6から出土した。30は、小型壺の口縁部で、わずかに外反する。全体に磨滅し、調整は不明瞭だが、内面胴部には指頭圧痕がみられる。胎土には白色砂粒が多く、雲母・赤褐色粒をわずかに含める。31は小型の壺で、全体に磨滅が著しく調整は不明である。口縁部は上部がわずかに開き、端部は平坦に整えられる。胎土は密だが、灰色砂粒が多く、赤褐色粒を少量含む。遺物から弥生時代後期に位置づけられよう。

S K 8(第9図) 調査区の南東側で検出された。長軸0.92m、0.79m、最も深い部分で0.32mを測る。平面形は卵型の楕円形を呈する。埋土中からは弥生土器が少量出土したが、小片が多い。

出土遺物(第10図) 32は古式土師器で小型壺の底部と考えられる。底径は8cmを測る。外面は縱方向の刷毛目、内面は下部が下から上方向へのケズリ、中位は横方向のケズリが施される。器壁はやや厚い。出土遺物から古墳時代初頭の遺構と考えられる。

S K 56(第9図) 調査区の南端付近で検出された。調査区の中央付近をほぼ南北方向に走るSD 15に掘り込まれる土坑である。長軸2.1m、短軸0.8～0.9mを測る。北半は約0.2m、南半は約0.3の深さがある。上面付近で遺物がまとまって出土した。

出土遺物(第10図) 33～46はS K 56から出土した。33は甕口縁部で、端部は丸みをもって作り出される。全体に磨滅が著しく調整は不明である。34～37は壺である。34はわずかに外反しながら外に開く口縁部で、口径16.2cmを測る。口縁部外面には指頭圧痕がみられ、粘土紐の接合痕がわずか



第9図 SK 6・8・56・101・105・118実測図 (101は1/20、その他は1/30)

に残る。頸部から肩部は縱方向の目の細かい刷毛目が施されるが、頸部は丁寧にナデ消される。肩部にも指頭圧痕が残るが、部分的な指オサエの後、暗文風のヘラミガキが施されている。最後に簡略化した直弧文のような線刻が描かれている。内面は外面と比較すると目の太い刷毛目後、粗くナデ調整される。胴部内面は横方向のケズリが施される。胎土は精良で、微細な白色砂粒、金雲母、角閃石を含む。35は小型の直口壺で、口径は10.8cmを測る。口縁部内外面は密なヘラミガキ、胴部外面は縱方向御刷毛目後、全面的にヘラミガキ、胴部内面は横・斜め方向の刷毛目後、部分的にヘラミガキが施されている。36は口径16.5cmを測る。全体に磨滅し、調整は不明である。内外面とも淡灰白色を呈し、胎土は密で、白色・灰色砂粒、赤褐色粒を多く含む。37は偏球状を呈する胴部で底部はレンズ状となる。器壁は薄い。外面に指頭圧痕、粘土紐の接合痕が残る。色調・胎土とも36と近く、同一個体と考えられる。38は壺あるいは甕の底部で、レンズ状となるが、中央部はわずかに凹ませている。39・40は小型丸底壺で、胎土は精良である。41～43は弥生土器甕で、41・42は口縁部である。41は断面錐先状を呈し、42はわずかに外反し、くの字状に屈曲する。43は底部でやや薄い平底である。外面は刷毛目がわずかに残る。44・45は高杯で、44は杯部で、磨滅が著しく調整は不明である。下位で屈曲し、大きく外側に開く。胎土は精良である。45は脚部で、全体に磨滅するが、内面には絞り痕が残る。胎土は精良である。46は小型壺底部で、外面は磨滅のために調整不明だが、内面は丁寧な細かいヘラミガキが施され、胎土は精良である。出土遺物には、混入したと考えられる弥生時代中期後半のものも含まれるが、主体となるのは弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物である。

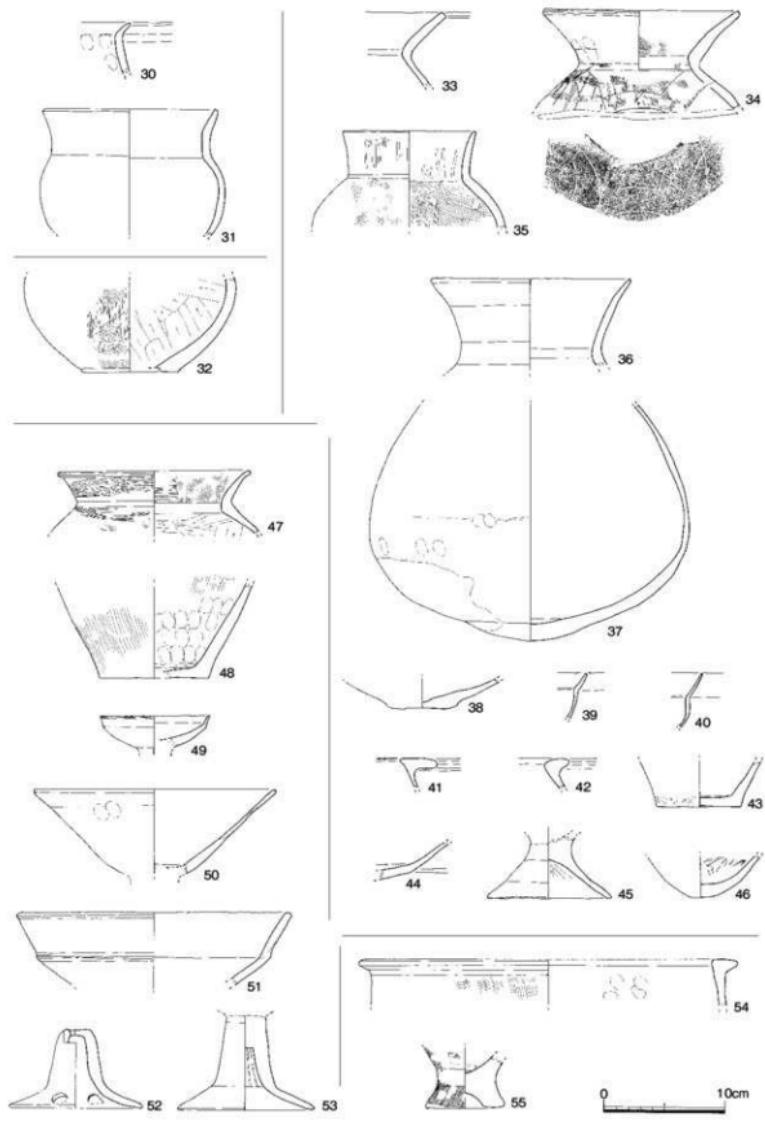
S K101（第9図） 調査区の北西端で検出された。長軸0.42m、短軸0.27m、深さ0.25mを測り、平面形は不整な楕円形を呈する。上面に弥生時代後期初頭の遺物がまとまって出土した。

S K105（第9図） 調査区の中央付近東側で検出された。S D15と重複し、これよりも古い。現状で、一辺4.1mを測る方形を呈するが、S D15によって削平されている部分を考慮すると、東西にやや長い平面長方形の土坑であったと推測される。最も深い部分で0.13m程度を測り、南東側に長軸0.5m、短軸0.3mのいびつな楕円形状の浅い掘り込みがある。

出土遺物（第10図） 54は甕口縁部で、断面逆L字状を呈し、あまり張り出さない。胴部外面には刷毛目が施される。内面には指頭圧痕が残る。55は甕底部で、器壁は厚く、上底を呈する。外面には刷毛目が施される。出土遺物から中期前葉の時期と考えられる。

S K118（第9図） 調査区の北東端付近に位置する。S D15に切り込むように掘り込まれた土坑である。長軸1.1m、短軸0.8m、最も深い部分で0.3mを測る。北半がやや深い。遺構の西半から中央付近にかけて遺物が集中して出土した。遺物は北側から投棄されたような状況である。

出土遺物（第10図） 47～53はS K118から出土した。47は甕口縁部で、わずかに外反する。口縁部外面から肩部にはタタキ、胴部外面には刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面にはケズリが施される。48は甕底部で、器壁はやや薄く平底を呈する。胴部外面には縱方向の刷毛目、内面中位には刷毛目が残り、下部には指頭圧痕が明瞭に残る。49は小型器台で、口径9.2cmを測る。胎土は精良で、微細な白色砂粒、金雲母を含む。50・52・53は高杯である。50は杯部で、直線的に外に向かって開く。口径は20cmを測る。全体に磨滅が著しく調整は不明であるが、外面には指頭圧痕、粘土紐の接合痕が残る。52・53は脚部である。52は底径11.4cmを測る。脚柱はやや短く、裾部には3つの孔が穿たれていると思われる。53は内面にシボリ痕が残る。51は二重口縁甕の口縁部で、山陰系だが在地産と考えられる。出土遺物には弥生中期前葉から古墳時代初頭のものが含まれるが、主体となるのは古墳時代初頭のものである。



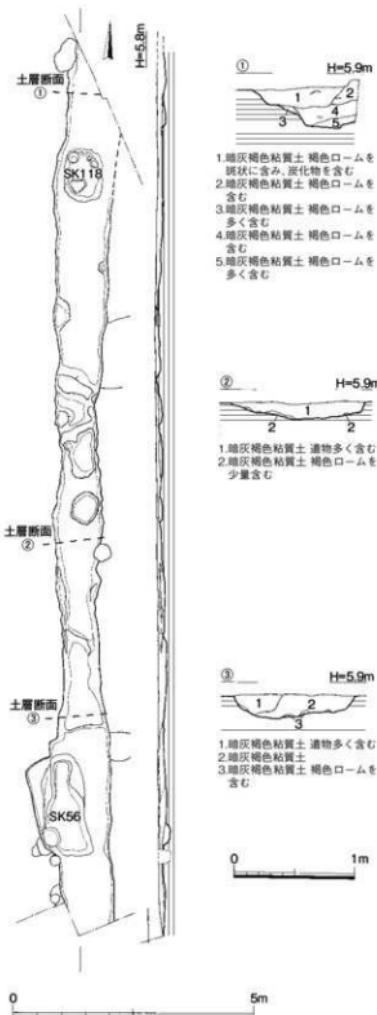
第10図 SK 6・8・56・101・105・118出土遺物実測図（1 / 4）

#### 4) 溝 (S D)

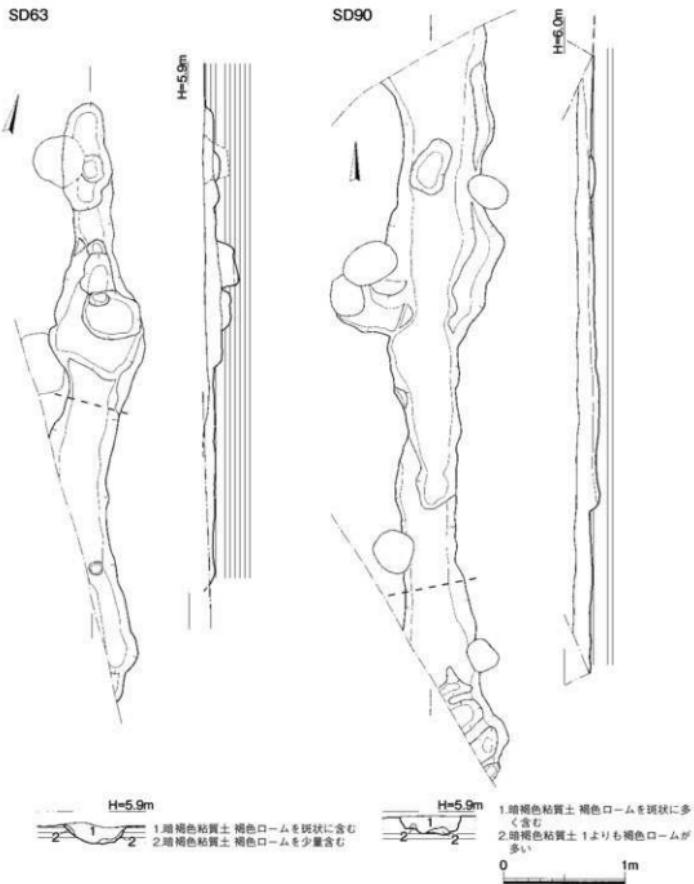
調査では4条の溝を検出した。

S D15 (第11図) 調査区の中央部をほぼ南北方向に直線的に延びる。主軸はN-3°-Wにとる。長さ18mを検出し、両端は調査区外に延びる。全体に幅約1mであり、最大幅は1.2m、最も細い部分で0.7mを測る。検出された深さは5~10cmと浅く、最も深い部分で30cmを測る。埋土は、暗灰褐色粘質土でロームが斑状に含まれ、水が流れた形跡はない。南側が浅く、北端に向かってやや深くなっている。埋土中からは、古墳時代初頭の土師器を主体に多くの土器が出土した。

出土遺物 (第13図) 56~89はS D15から出土した。56は弥生土器の在地系複合口縁壺で、口縁端部はわずかにつまみ上げられる。屈曲部部分はわずかに張り出し、刻目が施される。57は二重口縁壺の口縁部で、直線的に立ち上がる。器壁は薄く、淡灰白色を呈する。胎土は密で、微細な白色砂粒を多く含み、雲母・赤褐色粒を少量含む。山陰系で搬入品と考えられる。58は二重口縁壺の口縁部と考えたが、高坏の坏部の可能性もある。外面には縱方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目がわずかに残る。北近畿系で搬入品と考えられる。59は二重口縁壺の頸部である。全体に磨滅が著しいが、丁寧な作りで、頸部下半には指頭圧痕が残る。60は複合口縁壺で、口縁端部がわずかに欠損する。肩部の内面には指頭圧痕が残る。西部瀬戸内系か。61は直口壺の口縁部で、わずかに内湾しながら立ち上がる。内外面とも指頭圧痕と粘土紐の接合痕が残る。胎土には、微細な砂粒、赤褐色粒、径1~2mmの粒の大きな角閃石を多く含む。搬入品の可能性が高い。62は二重口縁壺で、二次口縁部分にはわずかな段が2段認められる。頸部にはやや幅の広い刷毛目調整、胴部内面はケズリが施される。胎土は精良で、角閃石、雲母を多く含む。備後産の可能性がある。63・64は壺の肩部で、頸部と胴部の境に

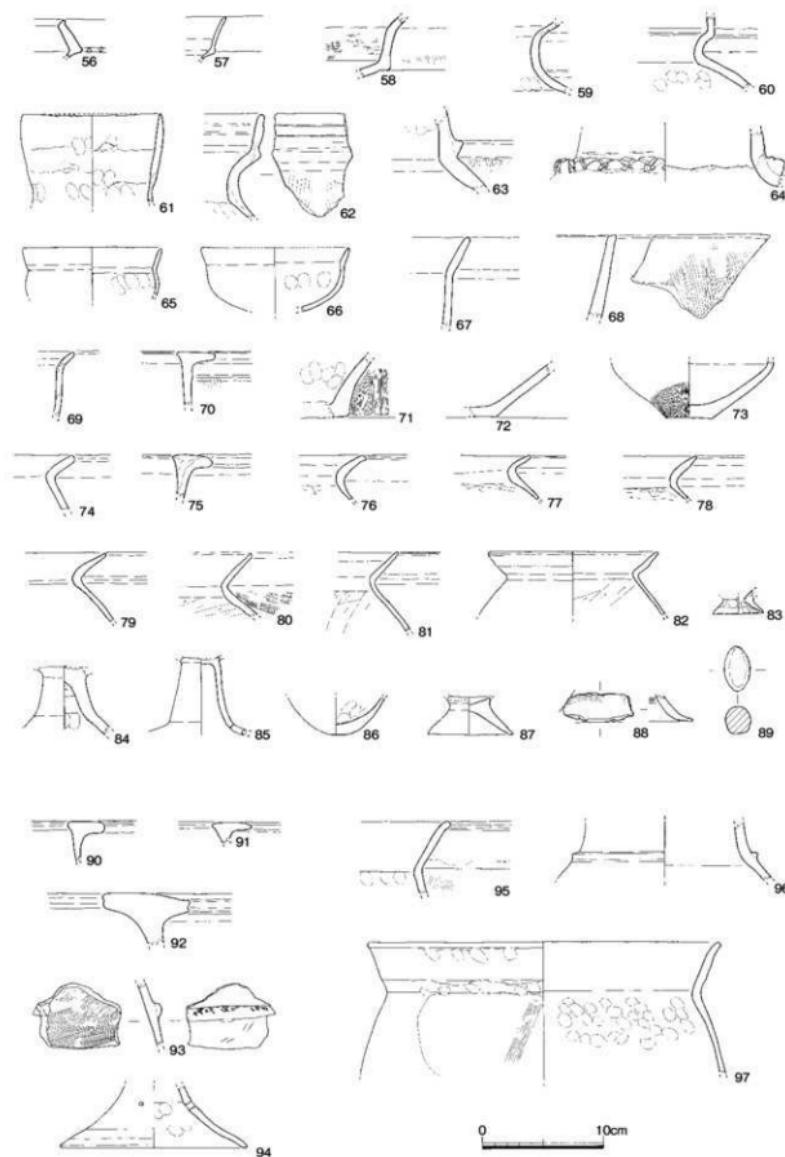


第11図 S D15実測図 (1/100・1/40)



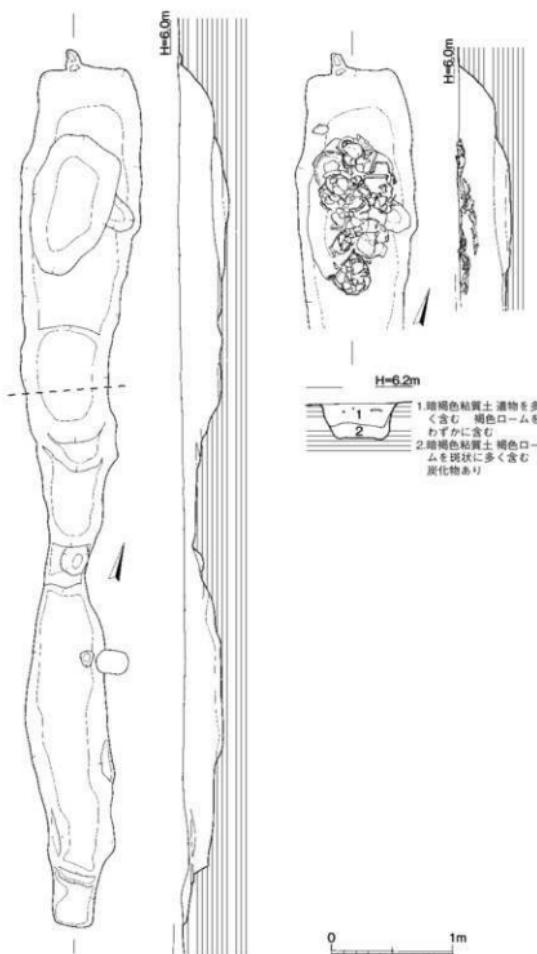
第12図 S D 63・90実測図 (1 / 40)

は断面三角形の粘土帯が貼付される。64の粘土帯は太く、端部が両刃状の板状工具で刻目が施される。内外面とも粘土紐の接合痕がわずかに残る。豊前・周防周辺のものか。65・66は精製の小型丸底壺で、65は口径11.4cm、66は口径12.2cmを測る。内面に指頭圧痕が残る。67は大型の鉢か。口縁部と胴部の境の屈曲部には粘土帯が貼付されていた痕跡がある。68は甕口縁部で、外面には粗い刷毛目が施される。69は甕口縁部で、直線的な胴部から短く立ち上がる。くすんだ橙色を呈し、胎土は密で白色砂粒を含む。軟質土器とみられ、韓半島南東海岸東萊貝塚等に類例がある。70・74・75は弥生土器壺の口縁部である。70は断面鋸先状、74は断面くの字状、75は逆L字状を呈する。70の外面には刷毛目が施

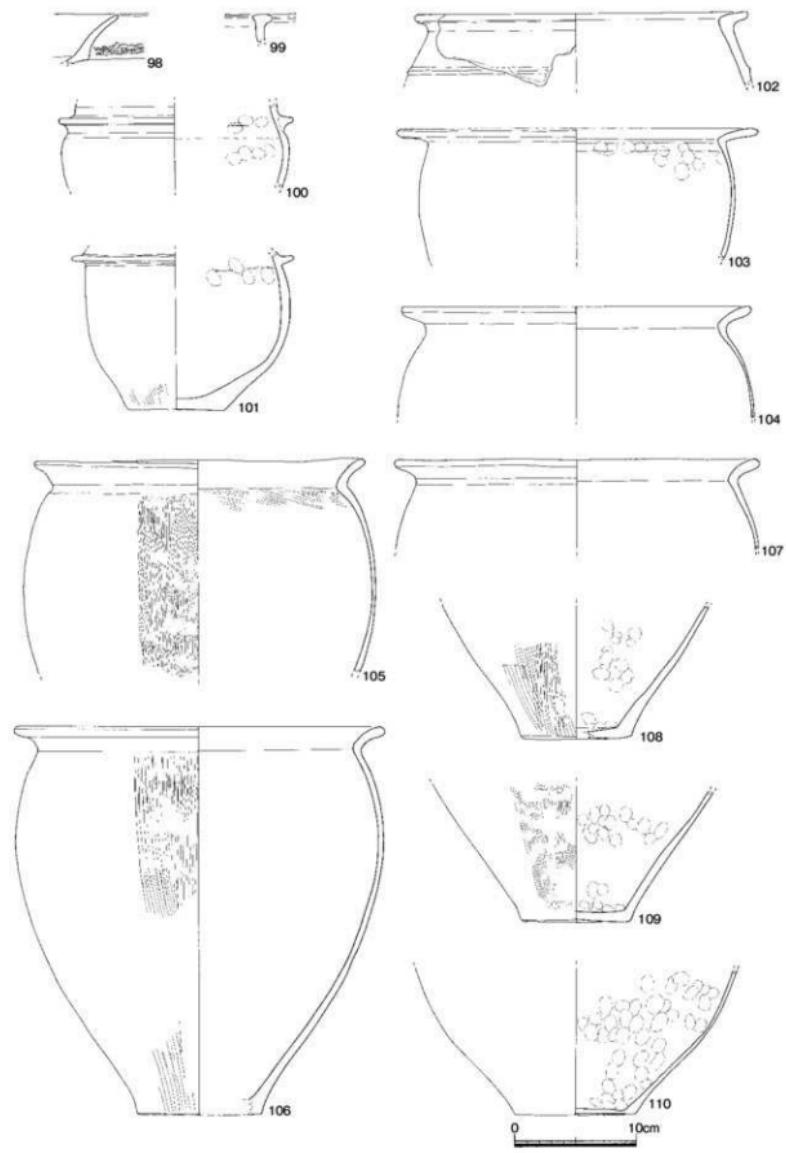


第13図 S D15・63・90出土遺物実測図 (1 / 4)

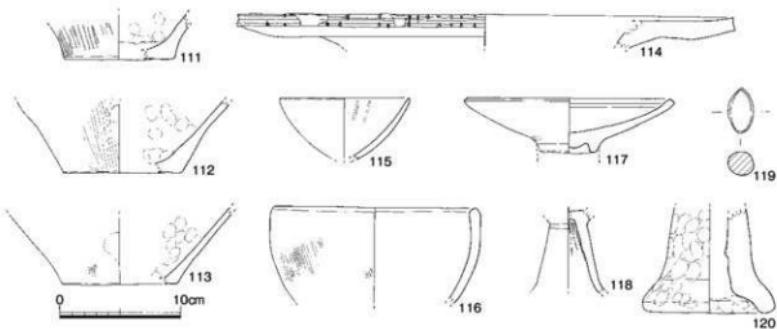
さる。71は壺底部で、器壁はやや厚く、平底を呈する。外面には縦方向の刷毛目が施され、内面には指頭圧痕が残る。72・73は壺の底部で、72の器壁はやや薄い。肩部外面には、赤色顔料が施されるが、大部分が剥落している。73は底径3.6cmを測り、器壁は厚く、平底だがわずかに凹む。外面は刷毛目調整の後、部分的にミガキが施される。76～82は古式土師器壺口縁部である。76はわずかに内湾しながら立ち上がる。西瀬戸内系と考えられる。77は伝統的V様式系だが、布留式系を模倣するものである。78は布留式系の古相のものである。79・80は筑前型庄内壺である。81・82は内湾し、微妙な凹凸がある。肩部は張らず、なで肩である。83は製塙土器の脚部で、底径4.2cmを測る。外面には指頭圧痕が残る。使用により被熱しており、内面にわずかに付着物が残る。84・85は高环脚部で、84の内面には指頭圧痕がある。85の胎土は精良で、わずかに角閃石を含む。裾部には穿孔がある。86は手捏ねの小型鉢の底部か。87は脚付鉢の脚部で、底径9.0cmを測る。88は器台脚部で、透かし孔があるようである。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目が施される。にぶい灰橙色を呈し、胎土には赤褐色粒を多く含む。小型化した段階の肥前型器台と考えられる。89は土製投弾で、長さ3.8cm、最大径2.2cmを測る。S D 15の出土遺物は、古墳時代初頭の土師器を主体として、弥生時代中期後半、弥生時代後期後葉～終末の土器が含まれる。出土遺物には古い遺物も含まれるもの、重複する遺構との関係から考えても、弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構であると考えられる。



第14図 SD 88実測図 (1/40)



第15図 SD 88出土遺物実測図(1)(1/4)



第16図 S D88出土遺物実測図（2）（1/4）

S D63（第12図） 調査区の西側や南寄りに位置する。長さ約5m、最も広い部分の幅0.8m、細い部分は約0.3mを測る。南側は調査区外に延びている。主軸はN-15°-Wにとる。南半の底面は平坦に近く、深さ0.1m前後、北半は土坑状に凹凸があり、深さ0.15～0.3mを測る。埋土は暗褐色粘質土で、褐色ロームを斑状に含み、水が流れた形跡はない。なお、北側にはS D88があり、分けて報告しているが、一連の遺構と考えられ、2本の溝の間は1.5m程の陸橋状をなす。ただし、上部が削平されており、溝が浅くなっていた部分とも考えられ、連続した溝であった可能性もある。

出土遺物（第13図） 91・93はS D63から出土した。91は壺口縁部で、やや垂下した鋤先状口縁である。93は壺の胴部で、薄帯状の突帯が貼付され、浅い刻目が施される。遺構からは、中期後半から後期初頭、後期後半～終末のものと考えられる遺物が出土したが、量は少なく、小片が多い。遺構の時期は中期後半～後期初頭と推測される。

S D90（第12図） 調査区の北西隅で検出された。長さ6.3mが確認され、両端ともさらに調査区外に延びる。ほぼ南北方向に延び、主軸はN-2°-Wにとり、S D15とはほぼ並行している。幅は概ね0.7m前後で、最も広い部分が0.8m、細い部分で0.4mである。南側1/3は深さ0.1m程度、北側2/3は一段低くなり、深さは0.2m前後を測る。埋土は暗褐色粘質土で褐色ロームを斑状に含む。水が流れた形跡はなかった。北側の一段低くなっている部分の上層を中心にして遺物が出土した。遺物には弥生時代中期前半～終末のものがみられるが、主体となるのは弥生時代終末のものである。

出土遺物（第13図） 90・92・94～97はS D90から出土した。90は壺口縁部で、断面鋤先状を呈する。92は壺口縁部で、口縁部を折り込み、上面に平坦面を作り出し、端部の中央は凹ませている。94は脚付鉢の脚部とした。上位に径5mmの穿孔がある。内面は指オサエ・指ナデ調整される。95・97は短頸壺の口縁部である。胴部外面は刷毛目後、ナデ調整される。頸部・口縁部外面には指頭圧痕、粘土紐接合痕が、胴部内面にも指頭圧痕が残る。96は壺で、頸部と胴部の境には断面三角形の突帯が貼付される。出土遺物から弥生時代終末に位置付けられよう。

S D88（第14図） 調査区の北西側に位置する。長さ約7m、幅は一定ではなく、0.3～0.95mを測る。主軸はN-13°-Wにとる。底面には凹凸があり、段掘り状に掘り込まれている。深い部分は0.1m前後、深い部分は0.3～0.4mであり、土坑が連続しているような形で溝状となっている。北側では1.3×0.6mの範囲に、完形に近い数個体の壺を中心に遺物が集中して廃棄されていた。遺物は、図示した土層断面の1層の部分に多く、2層には少ない。なお、掘り込みや埋土の状況、出土遺物の内容を考慮す

ると前述した S D63とは同一の遺構であると考えられる。

出土遺物（第15・16図）98は二重口縁壺の口縁部で、二次口縁下部に櫛描波状文が施される。99は甕口縁部で断面鋸先状を呈するが、口縁端部はほとんど張り出さない。100・101は小型の瓢形土器である。外面は刷毛目、内面には指頭圧痕、粘土紐の接合痕が残る。102・103は甕口縁部で断面L字状呈し、102は胴部上位に断面三角形の突帯を作り出す。103の内面には指頭圧痕が残る。104～107は断面くの字状を呈する口縁の甕で、径30cm前後を測る。105・106の外面は縱方向の刷毛目が施される。108～113は甕底部で、底径10cm前後を測る。平底を呈し、器壁は薄いものが多く、111はやや厚い。外面は刷毛目調整、内面には指頭圧痕が残る。114は高環坏部口縁部で、口径40.6cmを測る。断面鋸先状を呈し、口縁端部の中央をくぼませ、その上下に刻目を施す。外面には赤色顔料が塗布されている。115・116は鉢で、115は口径10.8cm、116は16.6cmを測り、ともに胎土は精良である。115の内面には部分的にミガキが施される。117・118は高坏で、117は口径17.4cmを測り、外面は刷毛目後丁寧なナデ調整、内面は一部にミガキが施される。山陰系か。119は土製投弾で、全面に黒斑がみられる。120は支脚で、底径11.0cmを測る。全面に指頭圧痕が残る。出土遺物には弥生時代中期末～後期初頭、弥生時代終末～古墳時代初頭のものがあるが、多くは弥生時代後期初頭のものである。遺構は弥生時代中期後半には掘削され、後期初頭頃に再掘削や溝浚えがなされた可能性がある。

## IV. 結語

調査で検出した遺構は、弥生時代中期中葉～後葉の堅穴住居2軒、弥生時代中期後半～後期初頭の溝1条、弥生時代終末の溝1条、古墳時代初頭の溝1条、弥生時代中期後半の掘立柱建物2棟、時期不明の掘立柱建物1棟、弥生時代中期前葉から古墳時代初頭の土坑、柱穴等である。検出した溝のうちS D63とS D88は、弥生時代中期後半～後期初頭の時期と考えられ、底面に凹凸があり、土坑が連続して溝状を呈している感があり、その形状や遺構埋土の状況、出土遺物を考慮して同一の遺構と考えることができる。現状ではこの2つの溝の間はつながっておらず、幅約1.5m程度の陸橋状をなしている。ただし、上部が削平されており、溝が浅くなっていた部分であるとも考えられ、本来は連続した溝であった可能性もある。また、S D88の北側では土器が集中して廃棄されている部分があり、弥生時代中期後半に掘削された溝が、後期初頭頃に溝浚え・再掘削が行われたことを示す可能性がある。さらにS D15と重複して検出された、SK 56とSK 118もS D15が掘削された後に、掘り直しや溝浚えが行われた痕跡であろうか。これらの土坑・溝で出土した遺物には、搬入品と考えられる外来系土器も多く、軟質土器と考えられる遺物もみられる。溝は、最も東側のS D15が弥生時代終末～古墳時代初頭、その西のS D88・S D63が弥生時代中期末～後期初頭、S D90は弥生時代終末頃に位置付けられる。S D15は、出土遺物の時期や方位を考慮すると、本調査区の南東側に位置する第22次調査で検出されたS D09・S D10の延長であると考えられる。このS D9・S D10は、さらに南東側の45・50・55・62・99次調査でも確認された道路状遺構の側溝と考えられる並列溝の西側溝の延長であるとの指摘がある<sup>(註1)</sup>。S D15の西側で検出されたS D63・88はS D15やS D90と比較すると、やや西に振れているが、第59次調査で確認されたS D01と時期や掘り込みの状況などが酷似しており、両者がつながる可能性もある。今後、さらに詳細な検討が必要であるが、道路状遺構の側溝と指摘される並列溝に先行する時期にも、同様の機能をもつ溝が掘削されていた可能性もあるだろう。

註1) 久住猛雄 1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』74 九州考古学会

# 写 真 図 版





(1) 調査区全景（南西から）



(2) SC 2 (北から)



(3) SC 62 (北から)



(4) SC 62遺物出土状況（北から）



(5) SB 111 (西から)

図版2



(6) SK 8 土層断面（西から）



(7) SK 8 (西から)



(8) SK 56遺物出土状況（南東から）



(9) SK 56遺物出土状況（東から）



(10) SK 56遺物番号34出土状況（東から）



(11) SK 101遺物出土状況（北西から）



(12) SK 105土層断面（南から）



(13) SK 118遺物出土状況（北東から）



(14) SD15 (南から)



(15) SD15土層断面① (南から)



(16) SD63・88 (南から)



(17) SD88・90 (南から)



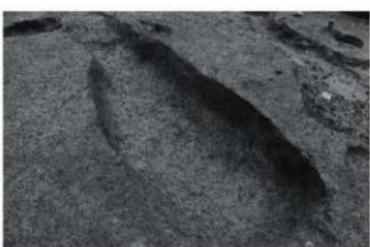
(18) SD88遺物出土状況 (北から)



(19) SD88遺物出土状況近景 (東から)



(20) SD88土層断面 (北西から)



(21) SD88完振状況 (北から)

図版 4



(22) SC62内SP114出土 25



(23) SK56出土 36



(24) SK56出土 34



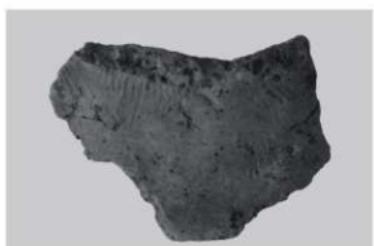
(25) SK56出土 37



(26) SD15出土 62



(27) SD15出土 69



(28) SD15出土 88



(29) SD88出土 106

報告書抄録

ふりがな	ひえ 72 - ひえいせきぐんだい 132 じちょうさほうこく -						
書名	比恵 72						
副書名	- 比恵遺跡群第 132 次調査報告 -						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 1294 集						
編著者名	吉田大輔						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2016 年 3 月 25 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
比恵遺跡群	福岡県福岡市 博多区博多駅南 4 丁目 1 番	40132	020127 33° 34' 42"	130° 25' 44"	20140529 20140712	214	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群	集落	弥生時代 古墳時代	堅穴住居、掘立柱 建物、土坑、溝、ピット	弥生土器、土師器、土製品、 石製品	弥生時代終末期から 古墳時代初頭にかけての 道路状遺構の側溝の一部を確認		
要約	本調査地は、比恵遺跡群が展開する台地のうち、中央台地の北西側に立地している。調査では、弥生時代中期中葉から古墳時代初頭にかけての堅穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴等の遺構を確認した。検出された溝のうち、最も東側のものは、比恵遺跡群および那珂遺跡群で確認されている道路状遺構の西側側溝の延長と考えられる。その西側で確認された 2 条の溝は、集落内の区画を意識した溝、あるいは先述した道路状遺構に先行する時期に掘削された、同様の機能をもつ溝である可能性もある。						

## 比恵 72

### —比恵遺跡群第 132 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1294 集

2016 (平成 28) 年 3 月 25 日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目 1 番 8 号

印刷 株式会社 西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚八丁目 2 番 15 号

